



TITLE:

腎リンパ管腫

AUTHOR(S):

百瀬, 剛一; 並木, 徳重郎; 瀬川, 囊

CITATION:

百瀬, 剛一 ...[et al]. 腎リンパ管腫. 泌尿器科紀要 1966, 12(1): 78-81

ISSUE DATE:

1966-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/112888>

RIGHT:

腎 リ ン パ 管 腫

千葉大学医学部泌尿器科教室 (主任 百瀬剛一教授)

百 瀬 剛 一
並 木 徳 重 郎
瀬 川 襄

LYMPHANGIOMA OF THE KIDNEY

Goichi MOMOSE, Tokujuro NAMIKI and Yuzuru SEGAWA

*From the Department of Urology, Faculty of Medicine, Chiba University**(Director : Prof. G. Momose. M. D.)*

This report deals with a case of lymphangioma of the left kidney arisen in a 6 months aged boy. The case is supposed to be the 9 th. reported one in foreign literatures, the 3 rd. in this country and the 1 st. male case.

The tumor in the left flank abdomen was first noted around three months of age and gradually became larger. X-ray examination revealed the tumor located in the left kidney. The extirpated kidney measured 9×6.5×5 cm and weighed 310 grams of which four fifth part was occupied by a honey-combed tumor and histologically diagnosed as lymphangioma.

は し が き

腎腫瘍の中で、我々が臨床的に日常しばしば経験するものは、Grawitz 腫瘍、Wilms 腫瘍等の悪性腫瘍がその大部分である。之に反して良性腫瘍は、多く臨床症状を全く現わすこともなく、気付かれずに経過するためかあまりその報告に接しない。

最近我々は生後6カ月の男児の左腎腫瘍を経験したが、その急速な発育、及びレ線所見よりWilms 腫瘍を疑い腎切除術を施行したが、切除標本を組織学的に検討した結果リンパ管腫の像を得た。本症は内外文献上極めて報告が少く、稀有の疾患であると思われるので、その症例の概要を紹介し、併せて本症に対する2, 3の検討を行った。

自 験 例

症例：6カ月、男児。

主訴：左側腹部腫瘤。

初診：昭和39年5月18日。

既往歴：家族歴。特記することなし。

現病歴：生後まもなく下痢を来し、発育は良好とは云えなかった。3カ月頃より左側腹部に腫瘤を認め、5カ月位より急速に増大すると共に食欲減退を来した。不気嫌な事が多かったが、血尿等には全く気づいていない。

現症：発育正常、体重7.5kg、顔貌正常、脈搏整、頭部・四肢 外陰に異常はない。胸部は聴打診上正常。左側腹部に超手拳大、境界比較的鮮明なやや硬い腫瘤を触れる。呼吸性移動を認め周囲との癒着のないことを思わせた。表在リンパ腺の腫張はない。

諸検査成績：

尿所見：黄色透明、蛋白(－)、糖(－)、pH 6.5。沈渣には極めて少数の上皮細胞をみるのみで白血球、赤血球等は全くみられなかった。

血液所見：赤血球数 514×10^4 白血球数 3,700。

血液型 AB型

血清梅毒反応(－) Mantoux R. (－)

肝機能検査：黄疸指数4, ZTT 0.5, CCF (－)
S-GOT 24.2, S-GPT 14.8

レ線所見：胸部、腎部、及び膀胱部の単純撮影では特記すべき所見はない。P. R. P. で左側腎部に超手拳大の腫瘍像を認める。I. V. P. (図1) では、右側

腎は機能、形態ともに全く正常である。左側腎の機能は良好であるが、腎上半部の腎盂、腎杯は腫瘍による圧排を思ふす像を得た。

^{203}Hg Neohydrin による Reno-scintigram (図2)は左腎上半を描出しなかった。

以上の結果より、左 Wilms 腫瘍を疑い、昭和39年5月27日、気管内挿管による GOF 非再呼吸式麻酔のもとに左腎剔除術を行なった。腎は周囲との癒着も軽度で、手術は短時間に終了した。

剔除腎の肉眼的所見：腎は $9 \times 6.5 \times 5\text{cm}$, 310g, 表面平滑、赤褐色で、割面をみるに (図3)、腫瘍部の大部分は淡黄色透明、一部血性な液体を充満せる小鶏卵大位までの大小様々な嚢胞が蜂窩状構造をなして存在し、正常腎実質は僅かに腎下極 $1/5$ を占めるのみであるが、腫瘍との境界は明確である。腎盂及び尿管には異常を認めない。

組織所見：大小種々な管腔とその間を埋める結合組織性の基質とによって海綿状を呈する腫瘍である。仔細にみるに、Lymphangioblasten の増殖による幼若な管腔像を示した部分や (図4)、又あるものはその内腔が内皮細胞により被包され完成した管腔像を示すものもある (図5)。基質部は幼若管腔周辺では豊富に、大型のその集合する部では極めて粗鬆に結合組織が存在し、円形細胞群やリンパ濾胞、平滑筋線維は認めなかった。又一部に存在する嚢胞は、その内腔を上皮性細胞によって被包され、おそらく原始尿細管由来の Stauungszyste と思われた。尚上記の管腔内の一部のものには赤血球の存在するものがあった。

以上の組織所見より本腫瘍はリンパ管腫と診断されたものである。

考 按

無症状に経過する小さな腎良性腫瘍は可成り頻発する様であり、剖検において、奥田は117例中に45例を、今野は108例中10例に、又 Zangemeister は50才以上の剖検例では、実に80%にこれを見たと言う。しかし、実際に何らかの臨床症状を呈し、医療の対象となったものは、我々の集計によれば、本邦においては僅か85例の報告に接するにすぎない。之等は混合腫瘍、腺腫、血管腫等が圧倒的に多く、リンパ管腫は我々の症例を含めて僅か3例にすぎず、稀な病態とみなされる。

一般に、リンパ管腫は皮膚、粘膜、特に口唇、舌等に多く、その他、頸部の筋肉、軀幹、及び縦隔、後腹膜腔等に発症する。

Wegner により本症は単純性、海綿状、嚢状の三種に分類されているが、本腫瘍を実質性臓器にみる事は極めて少く、Takano and Sekiguchi は、わずかに脾、副腎等に数例をみるのみと云い、彼等は本邦に於て、はじめて腎リンパ管腫(1955)の一例を紹介し、既報の Perlmann, Willis 等の4例を集計した。我々は更に Kretschmer, Largiader 及び 齊藤の症例に自験一例を加えて第1表に示す。

本腫瘍の病因に関しては、Takano 等、Largiader, Perlmann 等は胎生期に存在した迷芽より発生すると考えたが、Dycker の如く、こ

第1表 リンパ管腫症例

	報 告 者	年 度	年	性	大 き さ	症 状	摘 要
1	Henschel	1886	63	♀	リンゴ大		
2	Perlmann	1928	55	♀	児 頭 大	左側腹重圧感 腫瘤・右側腹部 疼痛	
3	Kretschmer	1934	59			腫 瘤	
4	Willis	1948	67	♀	直径 15cm	血 尿・疼 痛	
5	Wynn-Williams and Morgan	1950	33	♀	直径8.5cm	腫 瘤	
6	Takano and Sekiguchi	1955	7M	♀	$15 \times 13 \times 11\text{cm}$		Wilms 腫瘍に併発
7	Largiader	1958	31	♀			剖検
8	齊 藤	1963	60	♀		血 尿	
9	自 験 例	1964	6M	♂	超手拳大	腫 瘤	

れが単なるリンパ管の奇形状の奇形であるとし、Willis も又周固組織に対する態度から推理して、これが非腫瘍性であるとの見解をとり、その成因としてリンパ液の鬱滞、血栓等によるリンパ管の副走行路の異常発生等をあげている。

之に反し Perlmann 等の例では、明らかに周固腎組織を破壊し、且つ正常にはリンパ管の存在しない場所に形成されていることや、臨床的にも腫瘍としての症状をあらわすなど、本症の腫瘍説に賛成する意見も多いようである。

又、大田・桃崎によれば、一般にみられるリンパ管腫は若年者、とくに新生児にもっとも多く、先天的に発症した腫瘍であることを裏附けるというが、腎のリンパ管腫では、既報の9例中、自験例及び Wilms 腫瘍に併発した Takano and Sekiguchi 例の2例の外はすべて成人、とくに高令者に発見され、この腫瘍が極めて緩徐な発育をなす事が推測されるものであろう。

更に大田・桃崎によれば、一般にリンパ管腫においては管腔周辺の基質結合組織中にリンパ管構成にあずかる滑平筋線維の存在をみるのが普通であるというが、Perlmann は腎のリンパ管腫では、囊胞壁にこれを見ることはないといい、Willis も又これを欠如していることが腎リンパ管腫の特徴であると述べている。

自験例に於ても組織標本を詳細に検討したが、これを見出すことは出来なかった。しかし Takano 等、及び Wynn-Williams and Morgan の2例には基質中にこの筋線維の存在することが記載されている。

われわれの症例の腫瘍組織の一部に証された如き、リンパ管腔内にみられる赤血球の存在に関しては、之はしばしばみられるもので、Perlmann は主として手術時操作、とくに腎茎結紮による鬱血が管腔内への赤血球遊出をもたらしたものといい、Wynn-Williams はリンパ管腫に比して圧倒的に多い腎血管腫の報告例中には、リンパ管腫でありながら管腔内への赤血球の遊出せるものを見て、誤って血管腫として報告されているものの可能性を推測している。

リンパ管腫と鑑別すべきものとして、Largiadier は Allen, Dykerhoff, Henthorn 等の報告になる Peripelvische Lymphzyste をあげたが、これは腎盂と腎実質との間に存在し、腎茎附近のリンパ管通過障碍に起因すると考えられ帽針頭大から豌豆大位までの拡張リンパ管腔の集合である。

われわれが文献より集め得た9例のリンパ管腫の性別をみると、従来の報告例は第1表に示す如くすべて女性に発症し、男性例としてはわれわれの症例が最初のものである。一般に腎良性腫瘍についてみても、本邦においては男女の比は29:51となり圧倒的に女子に多く、上皮性腫瘍である腺腫のみ男子に多く、リンパ管腫を含めて非上皮性腫瘍は女子に多い。この点に関しては Apitz も同様な観察を行っている。

腫瘍発見年令についても一般の腎良性腫瘍と同様にそのピークは中年以後にあるが、本邦3例では2例(Takano 例及び自験例)が乳児期に発見されている。

臨床症状は腫瘤触知を主訴とするものが一番多く、その他、疼痛、血尿を訴えているが、いづれも所謂腎腫瘍の Trias と一致する。

最後に、本症の治療に関しては本症が良性腫瘍であるとのたてまえから、理論的には腎部分切除術も適応であろうが、その臨床的診断の困難さから、吾々の症例をはじめ殆んど総ての症例に行なわれた如く腎切除術はやむを得ないものと考えられる。

ま と め

6カ月男児の腎リンパ管腫を紹介し、併せて本症に対する2, 3の観察を行った。本例は内外文献上第9例目に、本邦に於ては第3例目に、男性例としては第1例目に該当する。

本論文の要旨は第293回日本泌尿器科学会東京地方会で報告した。

尚、病理組織所見を教示された本学病理学滝沢教授に深甚の謝意を表す

引 用 文 献

- 1) Perlmann: Virchows Arch. f. Path. Anat., 268: 524, 1928.

- 2) Kretschmer and Hibbs: Arch. Surg.,
29: 113, 1934.
- 3) Willis: Pathology of Tumors, 1960, Butterworth.
- 4) Wynn-Williams and Morgan: Brit. J. Surg., 37: 346, 1950.
- 5) Takano and Sekiguchi: Acta Medica et Biologica, 3: 127, 1955.
- 6) Largiader: Urol. Int., 6: 273, 1958.
- 7) 齊藤：皮と泌, 25: 768, 1963.
- 8) 奥田：日病理会誌, 41: 134, 1953.
- 9) 今野：東北医学雑誌, 47: 75, 1953.
- 10) 大田・桃崎：グレンツゲビート, 12: 811, 1938.

(1965年9月24日受付)



図 1

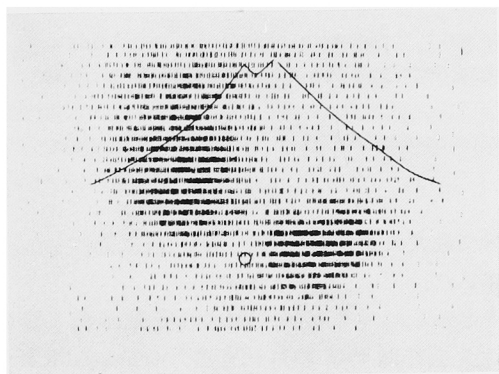


図 2

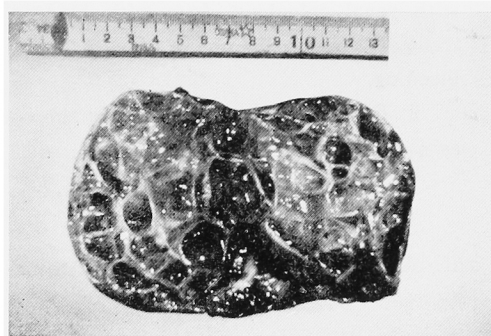


図 3

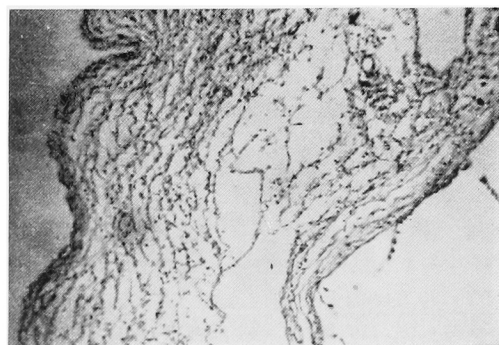


図 4

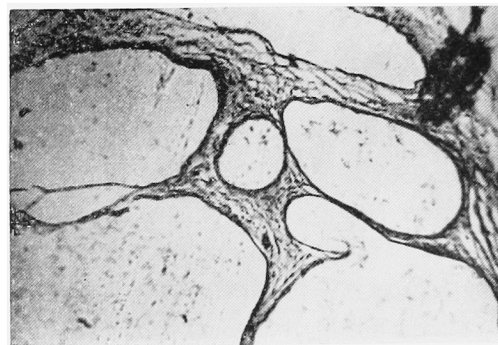


図 5